

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館 学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

SER no.056; はしがき

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2009-04-28 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 森茂, 岳雄 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/1837

はしがき

森 茂 岳 雄

本書は、2003年度と2004年度に行われた国立民族学博物館の共同研究「国立民族学博物館を活用した異文化理解教育のプログラム開発」の研究成果報告書である。

民博は異文化理解の宝庫である。本プロジェクトは、多く子どもたちにこのすばらしい異文化の世界を体験させたいとの思いから開始された。

折しも学校現場では、2002年度から新しい学習指導要領による「総合的な学習の時間」と「完全学校週五日制」が開始された。それにともなって、これまで学校に閉じ込められがちであった学びの場を「ひろげ」、「つなげ」ていくメディアとしての博物館の可能性が認識されるようになってきている。このような教育改革の動きの中で、新しい学びのメディアとしての、また学びの素材を提供するデータバンクとしての国立民族学博物館の役割は大きくなってきている。

本プロジェクトは、様々な角度から教育メディアとしての民博の可能性を探り、博学連携のあり方を考え、民博を活用した異文化理解教育のプログラムを開発、実践し、その成果を教育現場に還元することを目的としてなされた。

そのため、本プロジェクトは、これまでの民博の共同研究ではみられなかった館内外の人類学研究者、学習プログラムを開発し実践する小・中・高等学校の教師、その兩者をつなぐ大学の教育学研究者という異業種間のコラボレーションによって進められた。このような学校現場を巻き込んだ共同研究は民博では初めての試みであり、今後の大学共同利用機関としての民博の共同研究の一つの新しい方向性を示したといえる。

また学校現場においても、小・中・高等学校といった異なる校種や、社会科、地理歴史科、公民科、音楽科、技術・家庭科といった異なる教科の教師がディスカッションを通して課題を共有し、プログラムを作成することは稀であった。その意味で教育研究の新しい可能性を探ることにもなった。

毎回の研究会における異なる立場、分野からのディスカッションは刺激的であり、各自がさまざまな「かかわり」を模索しながら、学びのコミュニティが形成され、そのコミュニティによるプロダクトの一つとしてこの報告書ができた。

プロダクトはこれだけではない。現場の先生方のさまざまな授業実践を通して、学習者である児童生徒が多くのプロダクト（作品）を生み出した。本共同研究では、研究期間を延長し、本報告書の出版と合わせて、民博において本年の7月28日から9月5日まで子どもたちの作品を展示する企画展「学校がみんなと出会ったら——博学連携の学びと子どもたちの作品展——」を開催する予定である。また、この企画展と連携して8月4日には、「博物館を活用した国際理解教育」をテーマに日本国際理解教育学会と共

催で教員向けワークショップも計画している。

研究会のメンバー構成は以下のとおりである。

森茂岳雄 中央大学文学部, 民博・先端人類科学研究部客員研究部門 研究
代表者

中牧弘允 民博・民族文化研究部 研究副代表者

<館外>

居城勝彦 東京学芸大学附属世田谷小学校

今田晃一 文教大学

上田信行 前甲南女子大学, 同志社女子大学

小笠原喜康 日本大学

佐藤優香 前民博・中核的研究機関研究員, 国立歴史民俗博物館

柴田 元 大阪府立豊島高等学校

高橋順一 桜美林大学

田尻信壹 筑波大学附属高等学校

中山京子 前東京学芸大学附属世田谷小学校, 京都ノートルダム女子大学

八代健志 茨木市立葦原小学校

<館内>

小長谷有紀 研究戦略センター 八杉佳穂 民族文化研究部

林 勲男 民族社会研究部 山本 匡 先端人類科学研究部

福岡正太 文化資源研究センター 山本泰則 文化資源研究センター

<特別講師>

織田雪江 同志社中学校 福本謹一 兵庫教育大学

木村慶太 香芝市立香芝西中学校

本書の刊行に当たり、この場を借りて上記の共同研究員と特別講師の皆様にご感謝申し上げます。また特に民博の情報企画課専門員の宇治谷恵氏には共同研究会での示唆的な助言や共同研究会の運営や企画展の開催に関してさまざまなご協力をいただき感謝申し上げます。本書の編集に当たっては、中牧研究室の河田尚子さんと西雅代さんの協力を得た。あわせて感謝の意を申し述べたい。

本報告書が、博学連携を模索している学校現場や教師、さらには研究者に少しでも資するところがあれば幸甚の至りである。本書に対する率直なご意見ご批評を期待する次第である。

2005年 5月